

差別のない明るい町を

性同一性障がい者の人権



読売新聞の2013年10月10日号「私の先生」欄に、タレントの「はるな愛」さんの、『乙女心』に勇気づけられた」と題するインタビュー記事が掲載されていたので、全文をご紹介します。

生まれ時は男の子だったけれど、物心ついた頃から女の子になりたいと思っていました。赤いランドセル姿の小学生を見て、憧れに胸を膨らませたものです。

でも、祖母が買ってくれたランドセルは黒。わくわくしていた気持ちは消え、

「男の子と女の子はこうやって分けられるのか。この先どうなるの」と不安が募りました。

それを吹き飛ばしてくれたのが、大阪市立大和川小学校（現在は長原小学校

に統合）1年の担任、倉谷和子先生（故人）。

50歳ぐらいの小柄な方で、入学式の日、「よろしくお願ひします」と丁寧にお辞儀をし、眼鏡の奥の目を細めていました。その瞬間、「守

つてくれる」とすごく安心して覚えています。

先生はオルガンが上手で、休み時間になると、私の手を取って、弾き方を教えてくれました。家で作った農村風景のジオラマを見せた時には、「きれいに作れたね」と褒め、先生の机に飾ってくれました。

当時、私はマッシュルームカット。かわいらしいデザインや色の服を好んで着て、女の子と人形遊びやままごとをして遊んでいました。クラスの中でも異色の存在だったでしょうが、先生は「好きなこと、興味

があることは何でもやりなさい」と励ましてくれました。

その言葉と笑顔に何度救われたことか。中学でいじめられた時、性について悩んだ時、そして今でも心の中で「自信を持って」と背中を押してくれます。

先生のように、勇気を与えられる、愛ある人になりたいな。

（聞き手・桜木剛志）

今や、バラエティータレントとして、テレビなどにも多く出演し、ニューハーフの代表的な存在の彼女。彼女の生きざまから、「性同一性障がい者の人権」について、今一度考えてみたいですね。

参考・引用文献「読売新聞」

2013年10月10日号

市人権推進課（教育庁舎1階）

☎ 32・21122
FAX 33・3525

市民文芸 花みずき歌壇(297) 松並敦子・選

傘寿来て集えばいつしか病氣の話に薬効薬害薬剤師のごと

横須町 三宅 敏恵

《評》傘寿とは八十歳のことを言う。この年齢になると一つや二つの病を抱えているのが当然となり、その話題で盛り上がる。健康に対する関心が高く情報のあふれている今、薬に対する知識も豊富で、中にはいっばしの薬剤師のように薬効や薬害を教えしてくれるものもいる。テーマは決して明るいものではないが、読後感に暗さがないのは、病に負けず前向きに生きて行こうという雰囲気を読み取れるからである。

石垣の石路の花寒そうに雪をかむりて最敬礼す

榊渕町 松下 玉枝

ありふれた顔の証かスーパーで

待合室でも間違わるるわれ

江田町 深田 伴子

目に見えぬ景氣対策は次の世代背負う者らに重たき負担

中田町 倉橋 正則

娘は帰りに溝の掃除を丹念に

一人住むわれを思いてなせり

立江町 柳 ツギエ

わが家より2メートル先の空き地まで

必死にすがりシルバーカー出す

神田瀬町 小寺 雍子

まだ若き蓬を摘みて草餅に彼岸の入りの先祖の供養

赤石町 田原トシ子

雨の日は一日が長し独り居は

お茶とお菓子でまぎらわし過ぐ

坂野町 橋本千代乃

ようやくに掴まり立ちしし病室に

カラフル屋並に遠き山も見ゆる

神田瀬町 大西カヲル

痛みより逃るる術は眠ること灯を消し眼を閉じ羊数える

ひのみね総合療育センター 関 政明